2DB
二次元ドリーム文庫
エルフの国の宮廷魔導師になれたので
姫様に性的な悪戯（イタズラ）をしてみた2
小説 磯貝武連
挿絵 成海クリスティアーノート
試し読み版

第一章　姫様、眠らされる　006
第二章　女騎士、陥落する　018
第三章　姫様、歌う　055
第四章　女騎士、撮られる　076
第五章　姫様、魔道具を使う　098
第六章　女騎士、罰ゲームをする　122
第七章　姫様、癒やす　169
第八章　未亡人、毒牙にかかる　221
第九章　侍女、反応する　281
番外篇　侍女、思い出す　321

登場人物紹介

アイシャ
ナイアの護衛騎士を務めるデザート・エルフ。正義感が強くお堅い。ナイアが懐くキースのことが気に入らない。
ロアナ
王妃様の姉で今は夫の残した魔霊石のお店で店長をしている。
ベルナ
無表情だが気の利く侍女。お嫁さんにしたいエルフナンバー1。
ナイア
エルフの国のお姫様。キースのおかげで少しずつ魔法が使えるようになってきた。
ルー
ケットシー
下位の猫妖精でキースの使い魔。
キース・ブロックハウンド
元・正魔導師。ひょんなことで宮廷魔導師になったゲス男。

「どんなに頼んでもだ!!」
「そうですか……」
「そうだ!!!」
キースはここで一つ息をついた。それから残念そうな声で、
「じゃあ、アイシャは俺がシコシコする時のHな妄想が自分じゃなくていいんですね？」
「……え？」
「だってそうでしょう？　男っていうのはシコシコする時、そういう事を考えてするものです。アイシャとの映像があればアイシャの姿を考えながら出来ますけど、そうじゃなければつい別な女性の妄想が出る事だってあります」
「なっ……！」
「そうだな……あ！　侍女のベルナさんて綺麗な人ですよね。ああいうクーデレタイプ実は大好物なんです!!　ああ～～妄想に出て来ちゃったらどうしよう？」
アイシャにはよく分からない言葉もあったが、分かったのはキースがベルナとする妄想をしながらマスターベーションをすると言っている事だ。
キースがベルナと？　アイシャの頭の中で濃厚に身体を絡め合う二人の姿が再現される。
『魔導師様……宜しいのですか？　私なんかと』
『ええ……前から俺はベルナさんの事を……』
『……私も、魔導師様の事を前からお慕いしておりました』
『ベルナさん』

第四章　女騎士、撮られる

『ベルナと……そう呼んで下さい』
『じゃあ、俺の事はキースと……』
やがて二人の唇が重なり合ったところでアイシャは妄想を頭から打ち消すように叫んだ。
「そんなのダメだぁあああ!!」
その声にキースは心の中でガッツポーズを作った。だが顔は平然とさせたまま、
「ダメと言われましても、妄想は止められませんし」
「ダメだ！　絶対ダメだぁ!!　そんなの……ダメダメだぁ!!!」
ダメしか言わないアイシャにキースは首を傾げて問いかける。
「それじゃあ映してもいいですか？」
「……ううぅ……他の奴に見せたら殺してやるからな……！」
「シコシコ以外には使いません！」
「……なんでこんな変態を……私は」
情けないような哀しいような顔でアイシャはベッドに腰かけた。
「それじゃ、取り敢えずお着替えしましょうか？」
そんなアイシャに、キースは持って来た包みをアイシャに手渡した。

包みを受け取ったアイシャが文句を言いながらも着替えの為に脱衣場へ行っている間、キースは魔道具の準備をしていた。前にナイアとの事を映した魔道具は完全破壊されているのでこれは新たに作った弐号機である。大きさはコンパクトに画質は更に向上している。

それを用意してウキウキ待っていると、脱衣場の扉が開き中からアイシャが出て来た。
「ふ……ふおぉぉおおぉぉ!!!」
その素晴らしい姿にキースは我知らず吠えていた。恥ずかしさに顔を赤くしたアイシャが着た衣装。それは制服だった。帝都エレンバルドにある貴族の子女が通う名門校『聖ドロテア修道会附属女子学院』の制服である。それを着たアイシャがそこに立っていた。
あまりの似合いっぷりに思わず声を上げたが、よく見るとそれはまだ不完全体だった。
「アイシャ！」
「な、なんだ？」
「なんですかその着こなしは！」
キースは戸惑うアイシャの服装を乱れさせた。乱れを直すのではない逆の事をするのだ。
「スカートはもっと上げてシャツのボタンは開く！　胸のリボンはもっとだらしなく!!」
「あ！　こら、やめ」
「髪型もいつものじゃダメです！　ワンサイドでしばる!!」
出来上がった姿を見た時キースは感動で泣いた。黒ギャルがいる……デザート・エルフのギャルだ。今まで何人の男達が夢見て来た光景であろう？　そして何人の男達がその前に儚く散って行ったであろう？　キースは感動に震えてアイシャをもう一度見つめ、
「アイシャぁぁあ！　俺のアイシャぁあ!!」
そう叫んで抱きついた。
「きゃあ！　や、やめろ、ばかぁ!!　何なんだ!!」

「アイシャ！　好きだぁあ！　アイシャぁああ!!」
「あ、こらぁ！　当たってる！　硬いものが当たってるぞ!!　ひぃ」
その言葉にキースはバッ！　とアイシャから離れると、額に浮かんだ汗を拭った。
「あ……危なかった……理性をなくしかけた」
「なくしとったろうが！」
「この俺をここまで狂わすとは……制服ギャルエルフ……恐るべし!!」
アホな事を呟くキースを見ながら、アイシャは呆れ顔で疑問を口に出す。
「というか何なんだこれは？」
「え？　知りませんか？　帝都にある」
「それは知っているが、何で持っている？　やはり変態なのか？」
「違いますよ。作って貰ったんです」
「つくって……誰にだ？」
「キキー・モラにですよ」
キキー・モラはお手伝い妖精の一種で、裁縫などに優れた技術を持っているのだ。
「アイシャに着て欲しくて、慣れない召喚魔法なんか使って作って貰いました」
実はアイシャが拗ねた日に持って行った荷物がこの制服だったのである。これを着せて楽しもうとしたらアイシャが勘違いから拗ねてしまい渡せなくなった。
結果としては完全にデレてくれたのでよかったのだが、そっちにかまけていてこの制服の存在を忘れていたのだ。引っ張り出してくれたルーには本当に感謝している。

「いや〜〜〜それにしても……似合い過ぎでしょう」
キースは改めてアイシャの姿をまじまじと見つめそんな感想を漏らす。
だらしなく着崩したブレザータイプの制服。中のシャツはボタンを大きく開き胸の谷間が見えている。チェックのプリーツスカートはパンティが見えそうなほど上げてある。
これで少し濃い目の化粧をしてくれたら言う事なしなのだがキースに化粧は専門外である。どう伝えていいかすらわからない。なのでここは我慢だ。
その制服を着たアイシャはといえば、頬を赤く染め顔を逸らして呟く。
「……変態……死んでしまえ」
「でも本当に凄く似合ってますよ！　最高に可愛いです‼」
「嬉しいと思うか？　こんな格好が似合うと言われて……」
「え？　嬉しくないんですか？」
「嬉しいわけあるか！　だ、大体だな……歳を考えろ歳を……女学生の格好なぞしていい歳じゃないんだぞ私は！」
五十三歳の乙女エルフは恥ずかしそうにもじもじした。その様子がまた最高に可愛らしくてキースは優しくアイシャを抱き締める。
「アイシャは可愛いです。最高に可愛い女学生さんです。キスしたくなっちゃいます」
「な……なんだそれは……ばかもの」
「キス……していいですか？」
「……すきにしろ」

そう言いながらもアイシャは自分から先にそっと目を閉じた。そこにキースは唇を重ねる。甘くて濃厚なキスだった。絡み合った舌が互いの唾液の味を確かめた。そして舌が惜しむように離れた時、キースは潤んだ瞳のアイシャを見て思わずこのまま押し倒してしまおうかとさえ思った。その欲望を撮影の為にぐっと堪える。

「じゃ、映すのを始めましょうか」

魔道具を持ち上げそう言うと、目の前に立つアイシャの姿を早速映し始める。

アイシャはどこか手持無沙汰な感じで、手をぶらぶらさせてみたりその場で意味もなくユラユラしている。そんな様子を映しながら「それじゃ、自己紹介を」とキースが言う。

「は？　知っているだろう名前くらい」

「いや、そう言う事ではなくてですね……」

「……アイシャだ」

あまりにぶっきらぼうな物言いに溜息が出る。これは作戦を変えた方がいいみたいだと判断したキースはアイシャに近寄るとその唇をいきなり奪った。

「ふぇ⁉　……ん、ちゅ……ぺちょ、ちゅう、ちゅ、ちゅぱ……」

初めは驚いたアイシャだが、舌が絡んでくるとそれに応えて口を動かし舌を廻してゆく。互いの舌がねろねろと動くのを魔道具で映しながらキースはアイシャをベッドへと導いた。

本当は売春女学生風味で行きたかったが、アイシャが乗っていないのでカップルのHシーン風味に変える事にしたのだ。臨機応変が物事には重要なのである。

ベッドにアイシャを座らせると、キースは服越しに胸を揉み始めた。「んふ」と息を漏

らすアイシャの顔を映し胸の感触を確かめてボタンを外す。片手で器用に外されたブラウスのボタンの中では、褐色の大きなバストが豹柄のブラに包まれていた。パンティと合わせてこれもキキー・モラに作って貰った。ギャルはやっぱり豹柄である。

　そのおっぱいをブラの上から優しく刺激すると乳首が勃起してゆくのがはっきりと分かる。

「アイシャ、乳首硬くなってきましたね」

　ブラの中に手を入れて乳首を直接触る。

「あっ……いぅっ！　……ん……」

　アイシャの吐息を聞いて、またキス。舌を絡めながら乳首を抓ると身体がビクつくのが面白かった。何度もキスを繰り返し、頃合いになったのを見計らって「脚を広げて下さい」と頼む。アイシャはその言葉にゆっくり従う。アイシャが脚を広げている間にブラを外しておっぱいをぽろりと出させて乳首を舐めながらおま◯こを愛撫する。

　クリを焦らすように包皮だけをさわさわと撫でながら乳首を舌で玩んでいると切なそうな声をアイシャが漏らした。

「あっ……ん！　あぁぁっん、んんっ……っ！」

第五章　姫様、魔道具を使う

「おちんぽがどうかしたのですか⁉」
「いえ、姫様の純度の高い魔力のお蔭で大事にはなっていないのですが、それでもたまに夜になると暴走を……」
「そんな！　……ど、どうしましょう」
顔を青くして深刻そうに呟くナイアにキースは笑うのを堪えて続けた。
「ですが俺も魔導師の端くれ。研究を重ねた結果、遂におちんぽに対抗する魔道具の開発に成功したのです‼」
「す……凄いです！　すごいすごい！　キース様凄いですよ‼」
ナイアは飛び上がって喜んだ。伝説の悪しき魔道具に対抗する物を作れるなんてやっぱりキースは伝説級の魔導師なのだと確信し、そしてそれが堪らなく嬉しかったのだ。
キースはそんな喜んでいるナイアに、真面目な顔でこの前のハメ撮りのお礼を言う。
「これも全て姫様が魔力を送る所を映させて下さったからです。本当に助かりました」
助かったなんて言われると照れてしまうナイアは「そんな」と頬を染めた。その言葉だけで恥ずかしいのに耐えた甲斐があると思えるのだ。
「その出来あがった魔道具ですが……取り敢えず実物をお見せいたしましょう」
照れてもじもじしているお姫様にそう言うと、キースは鞄の中から包みを取り出す。そしてそれを開いて中身を見せた。
「姫様、これが俺の作った魔道具です」
「こ、これが⁉」

それはピンク色でぶにぶにした筒だった。下方に小さな穴が開いている。オナホである。どう見たってオナホである。キースが夜中に苦労しながら作っていたのはオナホだったのである。あの時キースはオナホの具合を何度も確かめていた。下半身丸出しで何度もだ。そう思ってもう一度あの苦悩している場面を思い出すと情けなくなってくる。

そんな物の事を知っているはずもない純心なエルフ姫は不思議そうにオナホを見つめている。キースはそんなナイアにオナホを差し出し、「触っても大丈夫ですよ」と微笑みかける。ナイアは恐る恐るそれを手に取った。

「ふわ……ぶにゅっとしてます。やわらかーい……あれ？　穴が開いてますよ？」

見た目が幼いエルフ姫にオナホを弄らせる。その光景は弥が上にもキースのおちんぽに血液を集めて行った。そんなおちんぽを意識しながらキースはナイアに説明を始めた。

「はい、その穴におちんぽを入れ、そしてあの薬を搾り出すのです。魔力の供給などは出来ませんが、それでも霊薬をおちんぽ内部に溜めないという事は可能になりました！」

「こ、これでおちんぽからお薬を？　……痛くないのですか？」

「恐らく大変な苦痛があるでしょう。しかしきっと耐えてみせます！」

キースはオナホを持つナイアの手を握り締める。

「一日でも長く姫様と一緒の時間を過ごす為に……俺はどんな苦痛でも耐えてみせます」

この言葉にナイアの恋する乙女回路はきゅんきゅんしまくった。自分の為にどんな苦痛も厭わない、まんま御伽噺の姫を想う英雄である。その素敵さに涎が出そうになる。

「キースさま……かっこいいですぅ……はうぅ」

自分に見惚れるナイアにキースは情けないと自嘲するような表情を作った。
「……いえ、そのような……作ったはいいのですがその痛みの恐怖に実はまだ使用していないのです……格好いい事を言っておきながら情けない」
「そんな！　キース様は情けなくなんかないです！　凄くご立派ですよ!!」
「姫様にそう言って頂けると心が安らぎます」
頭を撫でられたナイアは嬉しそうにオナホを握り締め元気いっぱいに問いかけた。
「そ、それで！　わたくしはこの魔道具で何をお手伝いすれば宜しいのでしょう!?」
キースは深刻な顔でナイアを見つめて質問に答えた。
「その魔道具の使用はどうしても自分だと勇気が出ないのです。なので……姫様がその魔道具でおちんぽから霊薬を搾り出しては下さいませんか？」
「わたくしが!?　これでですか？」
「はい。姫様にやって頂けるのならどのような苦痛にも耐えてみせる自信があります！」
ナイアは手の魔道具とキースを交互に見つめた。キースを助ける為にはそれをやった方がいいのは理解した。しかし自分がキースに苦痛を与えるなんてそんな事出来ない。どうしたらよいか分からずに当惑するナイアにキースは縋るような視線を向けた。
「姫様……お願い出来るのは姫様だけなんです……俺を、助けて下さい……」
助ける。キースが自分に歌を歌えるようにしてくれたように。今度は自分がキースを助ける。その想いにナイアの中に勇気が湧いた。
「……分かりました。お任せ下さいです!!」

ナイアはそう言ってキースの手を握った。決意の表情で、真剣な眼差しで、オナホコキをすると宣言してくれた。キースは超勃起した。

ssssss

ズボンを脱いだキースはいつもの防水シートの上に椅子を置いてそこに座る。既に勃起しているおちんぽはナイアがしてくれる事への期待もあるが徹夜の疲れも大きい。いわゆる疲れマラである。ナイアはキースの脚の間に座ってそれを見ると慌てて報告する。

「キース様！　おちんぽがもうこんなに大きくなってます！」

「ええ。それだけ霊薬が内部に溜まっているという事でしょう……」

「大変です！　早く出さないと!!」

そうは言うが魔道具の使い方が分からずに困っているナイアにキースが指示を出した。

「姫様、まずはその魔道具の中に唾液を入れましょうか」

「唾液ですか？」

「ええ。少しでも痛みを和らげる為です。出来ませんか？」

「い、いえ！　大丈夫です！　出来ます！」

「よかった。それではそこの穴を指で広げて下さい」

「……えっと、こう？　……うわぁ！　凄い広がります!!　ふわぁ、やわらかい」

姫様のおま〇こはもっと柔らかいですよ。そう心でホザきながらキースはそのエルフ姫がオナホを弄る光景を温かい視線で見つめた。

「さ、それではそこに唾液を入れて下さい」

「あ、はい。ん……れろぉ～～～……」
ナイアの唾液がたらぁ～っとオナホの中に垂らされてゆく。本当は潤滑油の方がいいが、初めてはナイアの唾液でと決めていたのだ。男は拘りを持たなければいけないのである。
口からオナホに糸を引いて流される透明な唾液はやがてオナホ内部を充分に潤した。
「姫様もういいですよ。さ、いよいよです」
「んぢゅ……は、はい！」
キースの期待に高まった顔を恐怖と戦っているのだと勘違いしてナイアは声をかけた。
「キース様、大丈夫ですよ！　わたくしがついております!!」
笑いそうになったキースは唇を噛んで我慢しながら感動に震えているふりをした。
「なんと心強いお言葉。勇気が湧いてまいりました！　姫様お願いします！」
ナイアはその言葉に頷くとオナホの穴におちんぽの先端をつけ、力を入れてずにゅっと入れて行く。唾液で濡れた中におちんぽが包まれてゆく気持ちよさに思わず声が出た。
「うほぉおお!!　お、おぉ！　ああ、こっ……これは！」
「キース様！　大丈夫ですか!?」
「うっく……おおっほ！　だ、だいじょうぶ、です……」
オナホ内部はナイアの膣をなるべく再現したがそこにざらざら成分を加えた為、全く違う感触がおちんぽを圧迫した。半分埋まった段階でナイアは手を止めていたが、それを更に進めるように促す。にゅるずぼっ！　と完全装着されたオナホにおちんぽは痺れた。
「やべ……これはやべぇ……」

「キース様、この後はどうすれば宜しいのですか？」
ナイアの言葉に上を向いて快楽に悶えていたキースは涎を飲み込み答える。
「そ、それをいつもお薬を出す時のようにごしごしとして下さい」
「はい……あの、痛かったら言って下さいね？」
「わかりました」と頷くキースを見てナイアは深呼吸をすると、オナホをごしごしと上下させ始める。唾液でじゅるじゅると滑るオナホ内部は肉とは違う無機質な感触でありながらその柔らかさと独自の形状でおちんぽを包む。そこに加減が分からないナイアがぎゅっと握り扱いてくるので痛いほどの刺激がキースに伝わった。
「ほっ！　うほ!!　ひ、姫様！　うぉおぁああ！」
「キース様！」
「あ、だめ、止めないで下さい！」
「は、はい！　頑張ってキース様！」
ナイアがオナホを動かす度に「ぐちゅにゅぼぐちゅちゅっぽ」と下品な音が響いた。
「おおっ！　ひめさ、ま。もっと応援して下さい……おひゃあ！　くじけそうですっ!!」
「はい！　えっと、えっと……キース様頑張れ！　負けちゃだめです!!　おちんぽからお薬いっぱい出しましょう！　おちんぽもがんばれー！」
ぢゅっぽぢゅっぽとコカれながらの射精応援。見ると王族貴種エルフがオナホでごしごししている。しかも加減も分からず懸命に責めているのだ。
「あ、あ、あああ！　うっぐ!!　姫様……息法！　して下さい!!　お願いぃ」

息法と聞いてナイアはすぐに立ち上がった。キースが痛みを取って欲しいと求めているのだ！　やらなければ‼

「キース様、今楽にしてあげますからね……んちゅ、ちゅ、れちょちゅれれろちゅ……」

ナイアは助けたい一心でキースの唇を自分から奪い舌を絡める。それはキースの脳内で椅子に男を座らせオナホコキしながらベロチューをしてくるトンデモビッチ姫になった。

「んれろ、べろちゅ……ちゅろお、ひめしゃま……ああ、ひめしゃま」

陶酔してしまうような気持ちよさに漏れ出そうになる精を必死で堪え舌とオナホの感触を楽しむ。だがそれにも限界があった。オナホが『ぬっぷずぷぬっぽずぷ、ずぷずぷずぷぷぷ‼‼』と下品な音を鳴らし亀頭を責め込む快楽が大きくなる。早くキースを楽にしてあげたい気持ちからナイアが速度を上げたのだ。

「うへ⁉　うおお！　ひめ、姫様！　はやい！　はや‼　うぐおおぉお！」

「キース様！　もうちょっとでお薬出ます‼　我慢して下さい‼」

「うおおお！　ドS姫‼　こんな！　おっほぉ‼」

「我慢ですよ‼　もうちょっとですぅ‼‼」

キースはどうしようもない射精欲求に耐えられず尻に入れていた力を緩めた。その瞬間オナホが大きく震えその後もビグンビグンッ‼　と律動して内部にザーメンを納めて行く。

「お、おぉおおぉぉ！　うぐいいぃぃ……ひぁ‼」

「みゃああ！　あ、あぁ、おくすり、すごい出てるです……ひゃう」

非貫通式の為、内部に溜まった大量のザーメンが挿入口から溢れた零れた。

怯えるベルナに比べてあまりに楽しそうなキースは、身体に力が入らない彼女の手を取ると、彼女の頭の上で手首をタオルで軽く縛った。少し力を込めれば外れるタオルでの拘束は、しかし今のベルナには鉄の枷と同じ強固な感触と絶望を与える。

「こ、こんなのいやです！　はずして！　はずしてよぉ‼」

身体を悶えさせるベルナを抑え込むように伸し掛かりまたキスを始めたキースは、そのまま転移魔法で脱ぎ畳んであるベルナの侍女服からヘッドドレスだけを手元に飛ばすと、唇を重ねた状態でそれを彼女の金髪頭につけた。

唇をゆっくり離し、身体を起こして自分の下にいるベルナを見つめキースは微笑んだ。

エロ下着をつけたエルフ侍女がタオル拘束され、潤んだ泣きそうな瞳で睨み見つめてくるのだ。こんなに欲情を誘う姿は正直ないと思えるほどだった。

「ベルナさん最高～。マジ可愛いですよ」

言いながら両乳首を抓り、唇を奪う。痛いほどの刺激で勃起した乳首がグリグリと弄られる衝撃と、息継ぎも出来ないほどの連続したキスにベルナは止めてと言う言葉すら発せられずキースのされるがままになってしまう。

手の自由を奪われ、身体に伸し掛かられて、その上でキスでまともに息も出来ない。

涎を垂らし苦しさに悶えたベルナは身体の奥がじんわりと痺れて快楽に酔い始めてゆく事に大粒の涙を流した。

壊れている。きっと自分はどこかおかしいんだ。そうでなければこんな事をされて気持ちいいと感じるはずなんかない。そしてそうさせたのは……。

潤んだ瞳で精一杯自分に伸し掛かる男を睨みつけたが、その表情は間違いなく快楽に火照り蕩けている雌の顔だった。

可愛く睨んでくる子犬みたいなベルナにもう一度だけキスをすると、キースは身体を移動させて侍女エルフの脚の間に身を置いた。既に肉棒はお掃除フェラとベルナの淫猥な姿にすっかり硬度を取り戻している。

広げさせた脚の、大切な部分を全く守っていないパンティの中央部に覗ける雌器官からは一度目の精液に破瓜の血が混ざったものがピンク色の粘膜を汚すようにトロリと零れてきていた。

膣中の気持ちよさを思い出していた所で、視覚的な興奮が合わさりキースは亀頭がパンパンに膨らみ肉竿の血管が太くなるのを感じた。これはもう挿入ないとと焦りにも似た気持ちが沸き起こりキースを急かした。

膣口から零れるザーメン液をおちんぽ先端で尿道口やクリトリスにまで塗り広げられて、ベルナはその感触と張り切ったに亀頭の圧力に顔を顰めた。

もうここまで来てしまえば止めるのは不可能だ。子供じゃないベルナにはそれくらいわかっている。それに何より亀頭が触れると膣内に快楽を思い出させて拒絶の言葉をベルナから引き出してはくれないのだ。

痛みと一緒に快楽を知った侍女エルフは無表情を少しだけ崩して雌になりかけている自分の肉体に戸惑いキースを受け入れた。

「いきますねぇ～」

あくまで軽いキースの言葉と共におちんぽが膣中に押し込まれてきた。ぐにゅると桃色の膣口を押し広げて赤黒い亀頭が入ってくると圧迫感と痛みにベルナの顔が切なげに蕩けだした。やはりどこまでも痛みに感じるエルフなのだとキースは嬉しくなる。

「ベルナさんその顔綺麗ですよ！　最高にエロいです……あぁ、ちんぽも気持ちいい‼」

吠えて腰を前後に動かすキースにベルナは乳首責めとキスの苦しさ、そして何よりこうされる事への期待で濡れていた膣襞を擦られ悲鳴を上げる。

「はぅっぎぃいい‼　い、いぃいい！　ま、まど……あぁあ！　まどうしさまぁ‼　も、もっと……お、ねがいぃいい‼　もっとぉおお‼」

ゆっくり動いてくれ。傷ついたばかりの膣が雁首に抉られ、初めて触れられたばかりの膣奥に亀頭を突き立てられて細い身体を仰け反らせベルナは哀願した。

手首を縛られている為に自由にならない手で必死にシーツを掴み、腰を痛みで仰け反らせるのだが、そうすると肉棒の侵入深度が一層深まる事をさっきまで処女だったベルナは知らなかった。

「ぐひっ‼　ひぅうぁあああ‼　あぁあああ！　っくぁあああ‼」

強い責めに敏感なベルナの身体は抓った時以上の硬さと尖り方で乳首を勃起させ、それをピストンでプルプルと揺らして噛んでくれと誘い込んでいた。

キースは応えるようにベルナの華奢な身体を抱えると腰を動かしたまま乳首を噛んだ。強めに乳輪ごと歯の間でガジガジと噛まれて、ベルナは膣刺激と乳首の痛みが混ざり今まで以上の喘ぎ声をみせた。

「お！　おぐぉおお！　ひぎ！　ひぎゅぃぃぃぃ!!　ふぐぅぅぅ!!」

堪えの利かない声を我慢しようとするせいで顔がより潤んで赤くなり、無表情が崩れてゆく。最高のメス顔になってゆくベルナにキースも嬉しくなって責め込んだ。

両乳首を均等に噛み終わる頃にはベルナのおっぱいはキースの噛痕だらけになっていた。噛めば噛むほど膣肉が柔らかく震え締めついてくるのでつい力が入り過ぎてしまったのだ。

ついナイアとは違う本物の無乳にハマって乳首ばかり虐めてしまったと自分に笑ってしまったキースはいけないいけないと膣に集中しそこから体位を変えた。

挿入したままベルナの片脚を持ち上げて側位に、そこから更に後背位にするとお尻だけを突き上げた形になる華奢な身体のエルフを後ろから激しく容赦なく犯しぬく。

「ぎゅ！　ぅぅぅぅう!!　ぅぅっ！　ぅぅぅぅぅっ!!」

生まれて初めてのバック責めは今までとは全く違う角度で膣肉を突き込んできて、刺激に慣れ始めたベルナにまた激しい身悶えをさせる。

しかし拘束されている手首は動かず、腰はがっちりとキースに掴まれている為に推し指を強く握りシーツを掻き毟って頭を振るくらいしか出来ない。

そんな精一杯の抵抗さえ意に介さず、キースはベルナの剛毛が覆うま○こからアナルを眺め、その中のピンク肉が自分のを咥え込んで絡み扱いてくる淫靡な光景に息を荒くした。

狭く小さなピンク色の肉が赤黒い肉棒を飲み込んで愛液を泡立たせる様は自分の行っている光景とはいえ激烈な淫靡さで興奮のボルテージを上げてゆく。それにベルナのお尻肉が一度目のセックスの時に行ったスパンキングで真っ赤になっているのも堪らない。

「あぁ、エロ……もうエロエロだよぉ」
苦しげなベルナとは１８０度違う下卑た笑みでキースは腰を動かし、上体を倒して後ろからまた乳首を責め始めた。
「あぁあ、ぎぃぅう！　や、だぁ！　いたいぃい！　ちくび、もげ……ぐぅううう！」
何度も噛んだ部分を重点的に指先で捏ねて引っ張ると、痛みにベルナは泣き吠えた。にもかかわらず膣襞は本人の意思とは関係なく痛みに喜び肉棒を更に撫で回すのだ。
そんな膣にキースは腰をより激しく振って、室内にはパンパン！　と言う尻肉に腰を叩きつける音が響いた。その音と共にやって来る衝撃もまたベルナには快楽になった。
そうやってバックを散々楽しんだキースはもう一度体位を正常位に戻した。どうしてもベルナの顔を見たかったのだ。
歯型の痕に痛みの余韻を残す乳輪周りを更に指で抓り捏ねられ、真っ赤になってしまった平らなおっぱいを小さく震わせて涙をぽろぽろ零すベルナを正常位で責めながらキースは反応を確かめた。
ベルナは痛みと絶望とそして快楽にすっかり抵抗の意思をなくして、早く終わってくれとただそれだけを願っているようだった。どうやら膣内の衝撃に身体が慣れてきたらしい。
だがそんな無反応では面白くない。そう考えキースはベルナをもっと感じさせ、もっと大きなアクメを経験させる為に繋がったままベッドの下からオモチャを引っ張り出した。
それはアイシャを一番最初に抱いた時に使った魔動マッサージ器だった。
「べ～ルナさん。じゃじゃ～ん。これでもっと気持ちよくなりますからね」

「え？」と呟いてそれを見せられた時、ベルナは一体それが何なのか分からず顔を顰めた。しかしキースが説明もなく魔道具を発動させ先端が高速振動で震え出すと、

「あ、え……な、なに……なにする」

「これをベルナさんの俺と繋がってる部分の上から押し当てます！　そうしながらおちんぽを突き入れすると……ね？」

分かるでしょと言外に言ってくるキースにベルナは青くなった。

やっと慣れたのだ。やっとこの衝撃に少し耐えられるようになったのにそんな事されたら……恐ろしさに首を左右に激しく振る。

「や、やめて……そんなことしないでぇ……しないでよぉ!!　しちゃやだ…ぁあぁあああ!!　あぎゅひぃいいいいい!!　お、おおぅううう！　おおうぅううう!!」

言葉の途中に振動部分を押し当てられ、逃げる事も出来ないままベルナはマッサージ器の刺激に圧倒的な快楽を感じて悶え吠えた。

その顔と声は今までの非ではなく、目を見開き口を大きく開け、細い咽喉が搾り出せる限りの声量で悶え喘いでいる。そう、それは間違いなく喘ぎ声だった。

「あぁああ!!　あぐひぃいいいいい！　いいいぃいい!!　いいひぃいい!!」

「おぉ！　きましたねその声！　いいなぁ～ベルナさんの悶え声。顔に似合ってないのが素晴らしい!!」

全く気にした様子もなく、寧ろ嬉しそうにベルナの膣から子宮付近に当たる部分をマッサージ器でドドドドドッ!!　と責め込むキースは、実際膣肉が信じられない絡みつきと濡

れ方、そして振動で震える気持ちよさに心をときめかせていた。
「あ〜〜、マジ最高……おちんぽが亀頭の先っちょから溶けてくみたい」
亀頭に容赦ない絡み方をする濡れ膣襞が雁首周りに貼りついて、それがピストンの度に鈴口の横辺りを舐めとってゆくような快楽が肉棒全体を痺れさせていた。そのままでも勿論充分気持ちいいのだが、更にマッサージ器の角度を変えると、
「あぁああ!! ここすっごい! 俺にも感じる!! ベルナさんの膣中でちんぽめちゃ震えてる!! これさいっこー!!」
最高と叫んだまま膣襞をガシガシ擦るキースに、ベルナは快楽の大きさに今にも気を失ってしまいそうだった。
マッサージ器を当てられた部分の内器官は、そこがベルナにとって一番の快楽ポイントとなり、その場所を集中的にキースが擦ってくるのだから堪らない。
正常位と後背位で満遍なくほぐされた膣道は外からと内からの快楽刺激に最高の感度状態をベルナに体験させてくれていた。
今までどこを触っても感じなかったのに、今では膣内のどこを擦られても気持ちがよくてお腹の中全体を快楽が満ち溢れ過ぎてダメになりそうだった。
「あーッ!! ああ――――っ!! あああああ!! ぎゅひぃいい! も、もうやだぁ!! もうやべてぇえええ!! おま○ごごわれるぅうう! ぎもちぃのどまんなぐておま○ご!! わだじのおま○ごごわれぢゃうぅうう!! ううぎぃいいい!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー

幻想魔王シャイン・ミラージュ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャルにとらわれないドキドキ★ラブ

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

呪詛喰らい人師

キルタイム・コミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹ちゃん

ハルキ

二次元ぷち文庫

あの人気作品の外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないキッチンベル！

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクターンノベルズ」から書籍化！

ピュア・キラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索